

「仕事と生活の調和」実現度指標の作成方法について

1. 「仕事と生活の調和」実現度指標の考え方

(1) 趣旨・目的

「仕事と生活の調和」実現度指標は、我が国の社会全体でみた①個人の暮らし全般に渡る仕事と生活の調和の実現状況（＝個人の実現度指標）と、②それを促進するための官民の取組による環境の整備状況（＝環境整備指標）を数量的に把握し、その進展度合いを測定するものである。

我が国の社会全体でみた仕事と生活の調和の実現度を数量的に測り、評価・分析することにより、仕事と生活の調和実現の阻害要因や、取り組むべき政策及び政策の優先度の把握に資することを目的とする。また、仕事と生活の調和の考え方やその現状を国民一般に広く普及させるためにも用いる。

(2) 指標の特徴

- 仕事と仕事以外の家庭生活、地域・社会活動、学習や趣味・娯楽など暮らし全般の活動分野や健康や休養の状況など幅広い分野を把握
- 個人の状況のみならず、個人が様々な活動を選択することができるような官民による社会基盤づくりができてきているかといった環境整備の状況についても指標化
- 働く人のみならず、無業、高齢者を含め多様な人々を対象

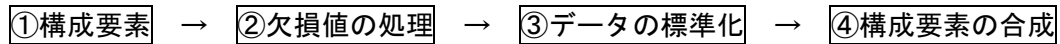
(3) 指標の体系

- 「個人の実現度指標」と「環境整備指標」の二つの指標から構成。
- 個人の実現度指標は、「Ⅰ. 仕事・働き方」、「Ⅱ. 家庭生活」、「Ⅲ. 地域・社会活動」、「Ⅳ. 学習や趣味・娯楽等」、「Ⅴ. 健康・休養」の5分野から構成。
- 環境整備指標は、分野を設けず一つの指標として算出。
- 両指標とも 2002 年を基準年として算出されており、指数の上昇は、仕事と生活の調和が進展していることを、また、指数の低下は後退していることを示す。

2. 作成方法

(1) 作業の流れ

まず、「仕事と生活の調和」した社会を代表するに適切な構成要素（データ）を既存の統計調査から抽出する。次に、構成要素の欠損値が存在する場合には、その時点のデータの補間を行なった上で、構成要素ごとに標準化を行ない、構成要素の合成を行なう。



(2) 各手順の方法

① 構成要素

- それぞれの分野および項目に関して、代表性のある構成要素を選定。
- 原則として1997年～2006年までの構成要素を使用。

② 欠損値の処理

ある2時点間のデータが欠損している場合、

実数の場合：幾何平均により平均変化率を求める。

割合の場合：変化幅が一定となるようにする。

③ データの標準化

各構成要素の変化率を標準化した上で、基準年の水準を100として年々累積する。標準化は、ある期間における対称変化率（割合の場合は変化幅）の絶対値の平均で除して算出する。また、基準年については、入手できるデータ数が比較的多いこと等から、2002年とする（標準化の方法は参考1を参照）

④ 構成要素の合成

（プラス・マイナスの判断）

構成要素のプラス・マイナスの判断は、その指標のレベルの上昇が「仕事と生活の調和」社会の実現にとって肯定的に評価される場合にプラス、否定的に評価される場合をマイナスとし、マイナス指標については、伸び率にマイナスを乗じた後に標準化した。

（総合化）

個人の実現度指標のウェイトについては、中項目、小項目の各々のレベルで同等ウェイトとし、5分野毎に合成指標を作成する。環境整備指標については、各小項目に属する構成要素を単純平均した上で、5つの小項目を5分の1ずつのウェイトで合成した（参考2）。

また、環境整備指標については、3つの社会の姿で3分の1ずつウェイト付けし、さらにそこに含まれる項目が同等ウェイトになるようにした上で、各項目に含まれる構成要素については単純平均した（参考3）。

(参考1) 個別指標の標準化手法

(1) 対称変化率の算出

- ・ ケース1：指標が通常の指数や現実のレベルそのものの場合

$$C_{(i,t)} = \frac{D_{i,t} - D_{i(t-1)}}{\left(\frac{D_{i,t} + D_{i(t-1)}}{2}\right)} \times 100$$

$D_{i(t)}$ ：個別指標
 i ：指標番号
 t ：時点
 $C_{i(t)}$ ：対称変化率

- ・ ケース2：指標が構成比等の場合、または0値や負値をとる場合

$$C_{i,t} = D_{i(t)} - D_{i(t-1)}$$

(2) 標準化因子(A_i)の算出

$$A_i = \frac{\sum_{t=2}^N |C_{i(t)}|}{N - 1}$$

(3) 標準化変化率($B_{i(t)}$)

$$B_{i(t)} = \frac{C_{i(t)}}{A_i}$$

(4) 標準化指数($S_{i(t)}$)の算出

基準年次の $S_{i(t)}$ を100とし、次の式により $S_{i(t)}$ を算出する。実現度指標では基準年次を2002年としているので、 $S_{i(2002)}=100$

- ・ ケース1：

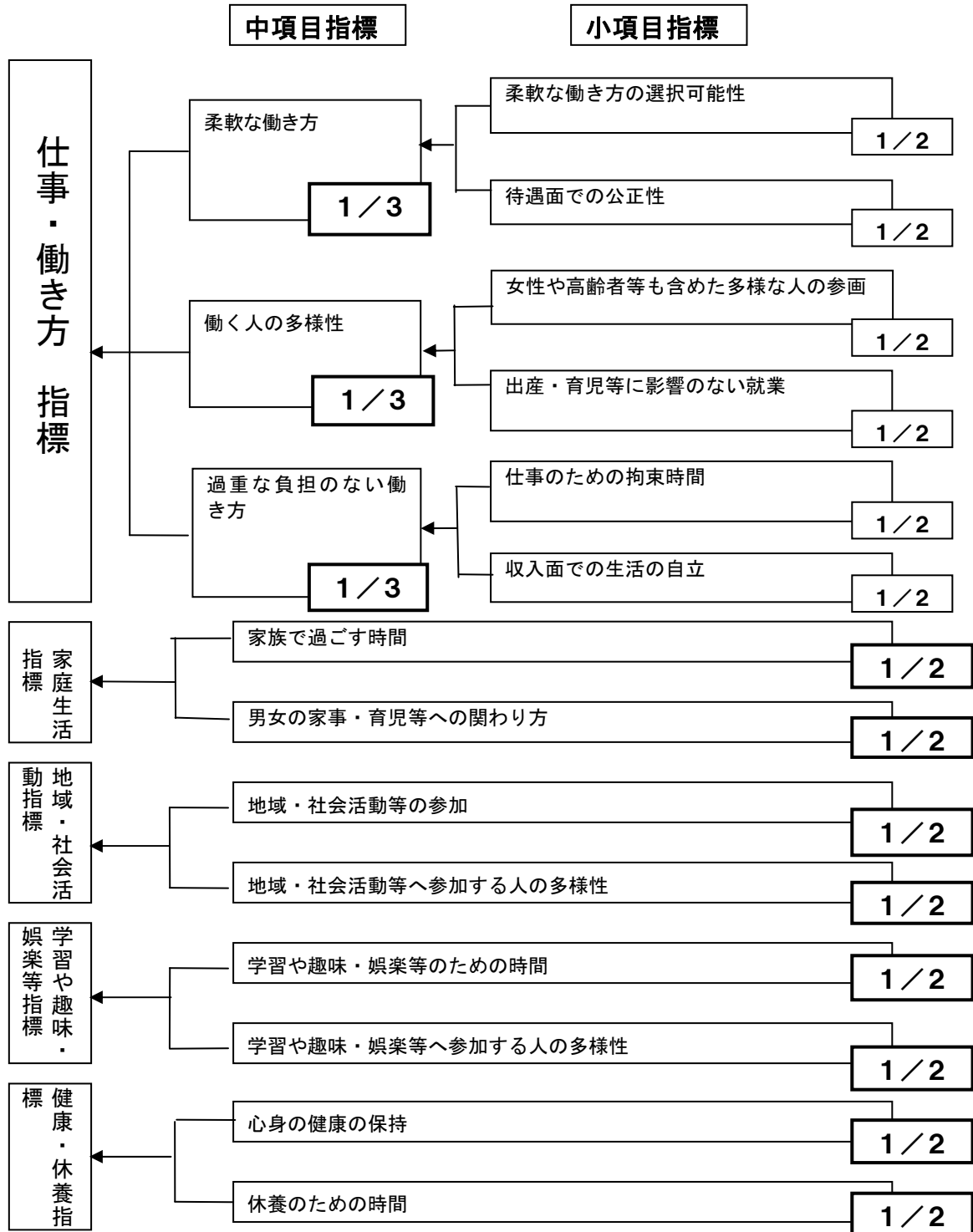
$$S_{i(t)} = S_{i(t-1)} \cdot \frac{200 + B_{i(t)}}{200 - B_{i(t)}}$$

- ・ ケース2：

$$S_{i(t)} = S_{i(t-1)} + B_{i(t)}$$

(参考2)

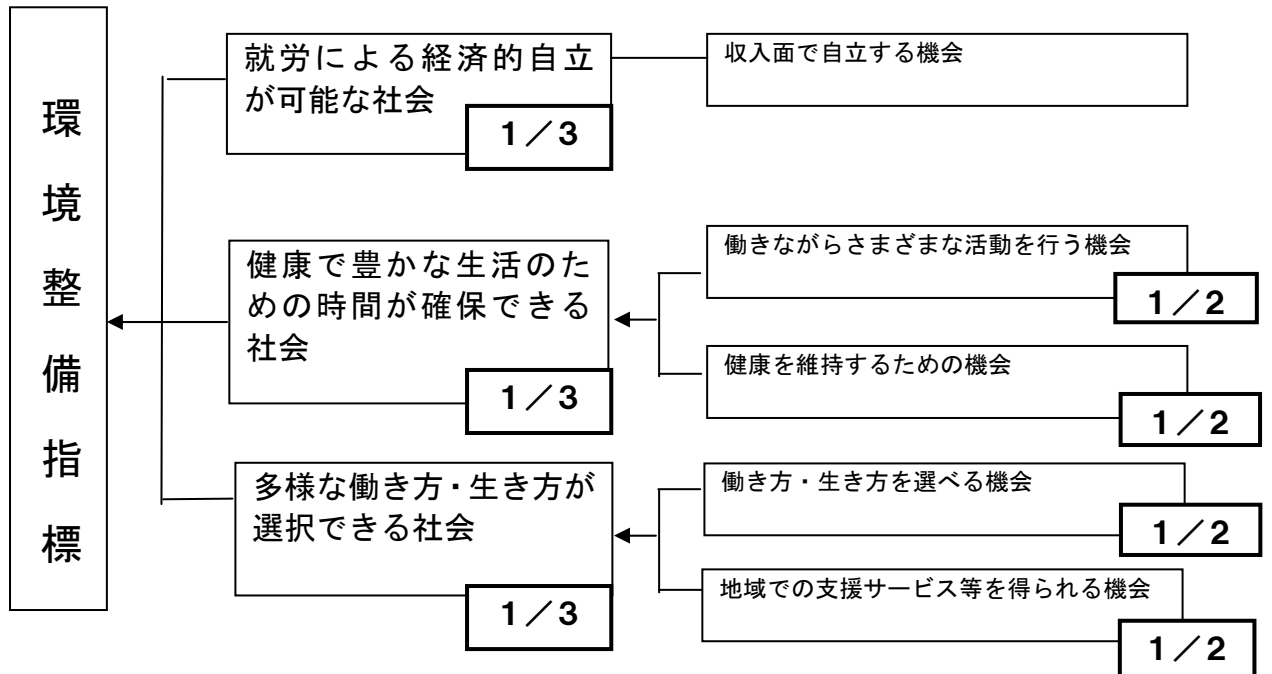
個人の実現度指標の合成ウェイト



中項目、小項目の各々のレベルで同等ウェイトとし、5分野毎に合成指標を作成する。

(参考3)

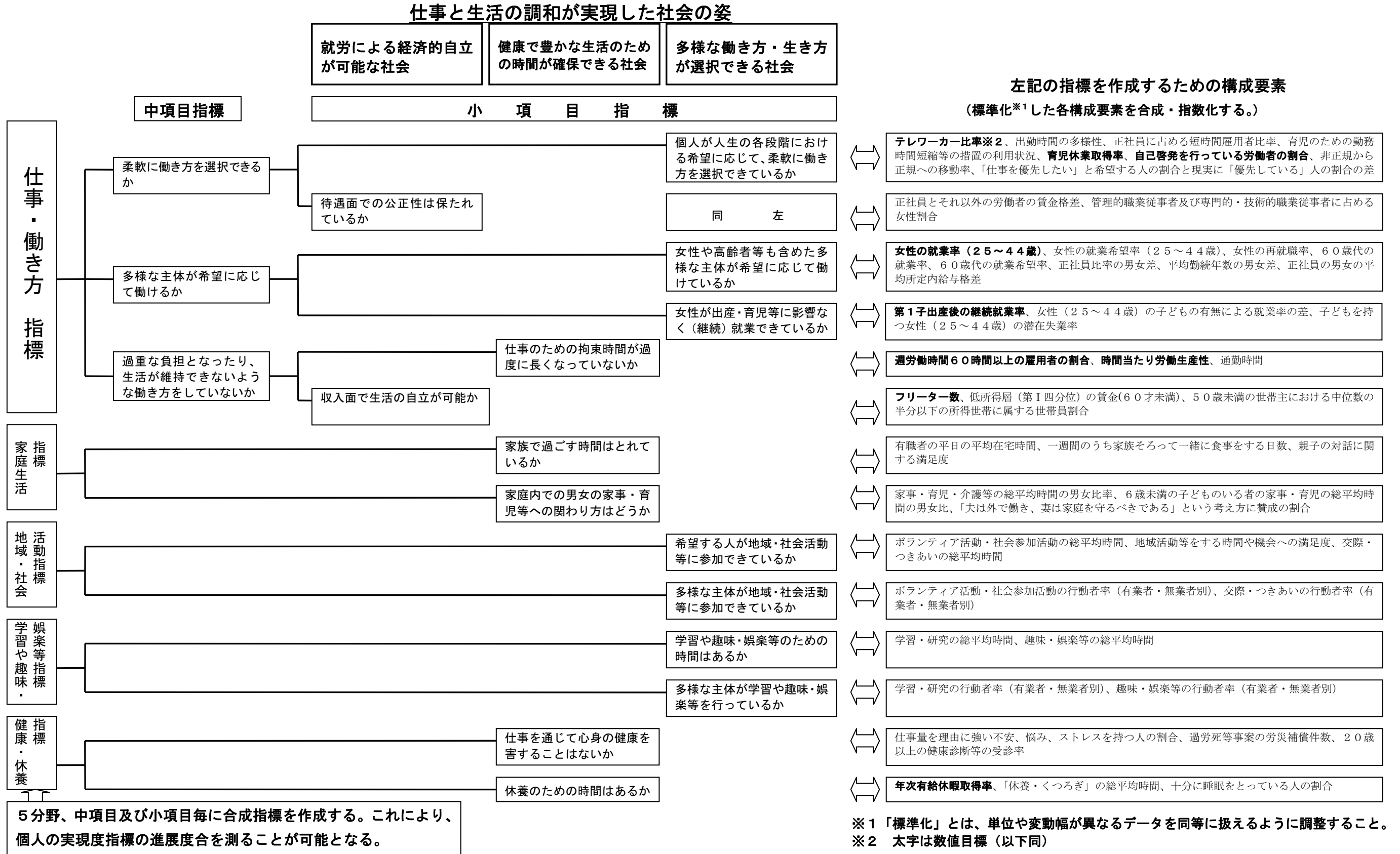
環境整備指標の合成ウェイト



「仕事と生活の調和」実現度指標は、我が国の社会全体でみた①個人の暮らし全般に渡る仕事と生活の調和の実現状況と、②それを促進するための環境の整備状況を数量的に把握し、その進展度合いを測定するものである。

I. 個人の実現度指標

「個人の実現度指標」は、5分野毎に指標を測定する。各5分野別の指標は更に、中項目、小項目指標に分かれる。小項目指標を行動指針における「仕事と生活の調和が実現した社会の姿」で整理することにより、その状況を把握することが可能となる。なお、各指標は、本行動指針で定める数値目標のほか、仕事と生活の調和に関連する統計（構成要素）を合成することにより作成する。



II. 環境整備指標

環境整備指標については、分野を設けず一つの指標として測定する。なお、同指標は、本行動指針で定める数値目標のほか、仕事と生活の調和に関連する統計（構成要素）を合成することにより作成する。

